

ゴドーを待ちながら

Waiting for Godot

小劇場

作： サミュエル・ベケット

翻 訳：岩切正一郎

演 出：森新太郎

出 演：橋爪 功／石倉三郎 ほか

企画意図

「JAPAN MEETS…」シリーズの最後は、世界演劇の流れを変えた記念碑的作品の登場です。

この作品は 1953 年にパリで初演され、当初は悪評で迎えられましたが、その後「不条理演劇」の代表作として演劇史に名前を残し、現代演劇の礎として今もなお世界各地で上演されています。我が国でも 65 年に初演され、以来さまざまな上演を重ね、また別役実をはじめ多くの劇作家たちに多大な影響を与えました。

今回の上演では、ともに新国立劇場初登場となる橋爪功、石倉三郎の二人を迎え、丁々発止のやりとりと、新鮮な顔合わせによる刺激的な舞台が期待されます。

作 品

田舎道、一本の木がある。

夕方。

エストラゴンが道端に座っている。靴を脱ごうとするのだが、なかなか脱げない。そこへヴラジミールがやってきて他愛のない会話が始まる。やがて、エストラゴンが立ち去ろうとするのをヴラジミールが留める。

エストラゴン どうして。

ヴラジミール ゴドーを待ってる。

エストラゴン そうだね。

二人はゴドーに会ったことはなく、いつまでも待ち続ける。そこにポッツとラッキーがやってくる。やがてラッキーは哲学的な演説を始める。

二人が去った後、少年が現れゴドーの伝言を伝える。今夜は来られないが、明日は必ず来ると。

そして翌日、同じ時刻、同じ場所。

エストラゴンとヴラジミールはまたゴドーを待ち続ける。

世界演劇史に燦然と輝く傑作。満を持して登場です。

翻訳家からのメッセージ

岩切正一郎

人から気晴らしを取りあげると、人はじぶんの運命をみつめ考えはじめ、そして人は不幸になる、とパスカルは言っている。それを逃れるために人は気晴らしをするのだ、と。『ゴドーを待ちながら』のヴラジミールとエストラゴン、待つあいだの、その気晴らしのようなおしゃべりと演技によって、奇妙にもじぶんの運命をみつめ考えている。滑稽と痛みのからみあい。

その意味で、わたしたちの日常は、おもいのほか『ゴドー』に近い。気晴らしをしながら（パスカルにいわせれば、仕事も戦争も気晴らしなのだ）、じぶんを見つめている。もっとも、舞台のうえではそれがいちだんと簡素に〈現実〉の度合いをましている。どうにもならない、どうにもならない、と言いながら、あの手この手で繰り出される本気か遊びかよくわからないことばと動き。そこから、ときに、哀切きわまる本音のようなものも、ぼろりとこぼれおちて……

『ゴドー』の舞台は、わたしたちひとりひとりが、自分の人生からくみだす無尽蔵のものを感ずる場所なのだと思う。

演出家からのメッセージ

森新太郎

すでに、さまざまな議論や解釈的となってきた『ゴドー待ち』。この作品が提起している問題や意味の大きさを前に、私はあらためて茫然とせざるを得ない。が、茫然とばかりしてられるはずもなく——。ご存知のように、ゴドーはやって来ない。昨日も今日も、そしておそらく明日もやって来ない。それなのに、えんえんえんえんと待ち続ける2人組・ディディとゴゴ。どれだけの体力？ 今回、私が一番こだわりたいのはそこだ。とにかくタフ。すっごいタフ。無意味なまでにタフ。ただ、もう、どうしようもなくタフ。この「どうしようもなく」というところに、圧倒的な喜劇があり、悲劇があるのでないだろうか。

そんなわけで、橋爪功さんと石倉三郎さんのキャスティングを熱望した次第である。奇跡的にもその願いは叶った。加えて、岩切正一郎さんによる抜群にリズムのよい新訳も得た。タフでハードな男たちが繰り広げる、愉快的な『ゴドー待ち』になると確信している。

ゴドーを待ちながら

サミュエル・ベケット

Samuel Beckett

サミュエル・ベケット（1906年4月13日 - 1989年12月22日）は、アイルランド生まれの劇作家、小説家、詩人。不条理演劇を代表する作家の一人であり、小説においても20世紀の重要作家の一人とされる。ウジェーヌ・イヨネスコと同様に、20世紀フランスを代表する劇作家としても知られている。1969年にはノーベル文学賞を受賞している。



岩切正一郎

Iwakiri Shoichiro

宮崎県出身。フランス文学者、詩人。現在、国際基督教大学教授。
 戯曲の翻訳に『ひばり』（ジャン・アヌイ）、『カリギュラ』（アルベール・カミュ）、音楽劇の翻訳に『兵士の物語』（ラミュ／ストラヴィンスキー）がある。
 その他の著作では、著書『さなぎとイマーゴ・ボードレールの詩学』、詩集『エストラゴンの靴』、翻訳書『ノアノア』（ポール・ゴーギャン）、『世界文学空間 文学資本と文学革命』（パスカル・カザノヴァ）、『サタンが稲妻のように落ちるのが見える』（ルネ・ジラルール）など。
 2008年、『ひばり』と『カリギュラ』の翻訳によって、優れた戯曲翻訳に贈られる湯浅芳子賞を受賞。

森新太郎

Mori Shintaro

東京都出身。演出家。演劇集団円、会員。
 これまでに演出した主な舞台に、デア・ローアー作『最後の炎』（新国立劇場リーディング公演）、遠藤周作没後十年行事・朗読劇『沈黙』（主演、橋爪功）があり、円では『ロンサム・ウェスト』『天使都市』（仲谷昇、岸田今日子追悼公演）『田中さんの青空』『孤独から一番遠い場所』『コネマラの骸骨』を演出。自身が主宰するモナカ興業でも活動中。
 2009年、毎日芸術賞第11回千田是也賞受賞。

